

べりしが、我は出立の用意に忙しく、それより五日ありて、東上の途に上りぬ、波止場なみどまりに立ちて、涙くみ給へる、伯母上の御かほの、今も目の前にありて、いつの世に忘らるべき、かくて我は事なく東上し伯母上おばあさまより、喜びの玉章たまじょうなとれさせ給ひて、三つきがほどはゆめのまに過し、十一月の半、伯母上の重くわづらひ給ふよし報せあり、驚かれてその文を、たにきれるまゝにて暫しは途方みちがたにくれてありしが、友なる人に勸まされて、逸早く案じ出たし、鄙ひなには非らじと思ふ、くさくさの果物取そろへ、箱に入れて、小包郵便こぶきゆうびんに托しぬ、やがて半時も経るに、戸口には電報の聲すなり、臆おそを冷して封おし開けば、兄上の許より、伯母上のなくなり給へるよし、告おさせ給へるなり。嗚呼ああこのたより、今少し聞かて、あらましものをと、文明の利器も、時にとりては恨みられき、さても一度は、御命の程もいかにかと聞えし姉上は今も安らげく在して、それが爲めに、心をなやまし給ひし伯母上の、むなしくなり給ひぬるよし思へば、はかなきものは、人の世になん。目のあたり聞え上たき事の數々、あるにと打かこてども幽顯界ゆうけんがいを異にして見まゐらすべき由も、なきぞかなしき。さるにても一片の紙のはしに、告げおこせし言葉の、いかで、我心に世になき人と、思はしむるを得んや、ことしの歸省きせうにも波止場に立給て、打笑みつゝ迎へ給ふ、伯母上のおはするものと、のみ思ひて、旅立つなるべし、さは云へさ、今は世にいまさぬものを、嗚呼如何にせん、今は世にいまさぬ我伯母上よ。

〓

遊戯の方針 (承前)



町田則文

それならば前のやらな事實がある、然らば教育上ドウ云ふ風に考へたらば宜いか、前の事實を下ウ云ふ風に教育的に應用すれば宜いかと考へれば左の三ツに應用して考へたならば宜からうと考へる第一は男子と云ふものに就ては兎角野蠻の風を餘程帯びて居る、殊に其粗暴も十歳位か最もヒドイ、十七八歳にもなると一般の事を考へる、十歳から十一歳頃は自分勝手でやると云ふ傾きがある

故に餘程其間は吾々が相當な抑制をして制限をして行くこと云ふ必要が起つて來ふと考へる、それ若しそれを抑制せずして子供の儘に任かして置けば遂には九で一方に僻した我儘勝手人間を作ると云ふ事になる、幼稚園は左程の事も起るまいが男子に就てはさう云ふ傾きがある、故に男子に就ては矢張其傾きを相當な間に旨く制して行くこと云ふ考へを始終有つて行かねばならぬ、これは六ヶしい事で餘り制し過ぎると折角の發達を害する、それ程活動の時期であるから唯押へ付ける、大人の考へでやつて子供に對して消極的の處置をする事があつて、幼稚園の時から其考へを容れて置いて十歳位になると激しくなるから之を監督するものが抑制して行く、同じ遊戯をするにも我儘勝手にさせないで成るべく一般の人の迷惑にならぬやう

に仲間の迷惑にならぬやうに或る適度内に抑制して行く、吾々が遊戯を課するにもさう云ふやうに遊戯を仕組んで課して行くこと云ふ事が必要と思ふ第二には殊に男子の爲めにはそれが社會的、他日世の中に出て仕事をすると云ふ基礎に吾々は考へる、詰り人間はそんなに身体を活動するは他日世の中に出て仕事をせず居られぬと云ふ性質を現はして居る、他日吾々が世の中に出て仕事をさせる基礎にすると云ふ事を持つが肝腎と思ふ、幼稚園なり小學校に於て種々遊戯をさせる時にそれが他日世の中に出て仕事をする本になる、唯物を知らず爲めに遊戯をさせるのでない、他日仕事をさせる世の中でする仕事の基礎にすると云ふやうな事に吾々が應用して行くこと云ふ事が起つて來る、第三は男女子は別に成るべく別にするが宜ろし種

々の遊戯の事を組織するには或る程度までは一所
 で宜いが、或る程度以上は一所にはいかぬ、と云
 ふは自然に任かせて置けば男子のする遊戯と女子
 のする遊戯と違ふを以て知るを得べし、それは天
 性である、自然の傾きである、故に男女子は或る
 程度より異なつて凡ての事を課すと云ふ考へを有
 たねばならぬ、何でも男女は凡て同一にせねばな
 らぬ、或る意味に於ては男女同一にも同じやうな
 興味を感じる、大体は一方は筋力を勞するやうな
 事、甚しきは粗暴と云ふに至るまでの事をやる、
 一方は手の仕事とか、他人を惠むとか社交的事
 とかに自然發達して行く、それで男子は自ら別
 かれて居る、或る程度までは吾々が特別に考へね
 ばならぬと云ふ事が起つて来る、従つて種々の課
 目等に就ても男女別々に考へてすると云ふ事が起

つて来る、それから此遊戯は遊戯の種々の事實の
 統計から起つて来て此三ツが異らうと思ふ、それ
 ですからして只今申した事實は大に参考になると
 すれば、さう云ふ事實は幼稚園及び小學校に於て
 遊戯の方針を極めると云ふ事は餘程大事である、
 唯これが面白さうであると云ふ考へからはかり極
 めると適せぬ、畢竟子供には徒らに機械的に遊戯
 を課すれども面白からぬ、それは自然の發達の今
 の事實から出来て居らぬと云ふ事もあるから面白
 くないのであらうと思ふ、それで強いて面白から
 してやるは無理な事で、ドウしても子供に適せぬ
 事がありますから其處等は吾々教育家は互ひに研
 究せねばならぬと思ふ、子供が随意に遊ぶ種類を
 集めてそれから起つた論定である、更に又大人が
 子供の爲めに遊戯を組織してやると云ふやうな事

はこれは年を取つた者には大人が組織した遊びな
 どは随分子供が好む事も起る、只今のは小さい子供
 の事である、併し幼稚園などで自分の工夫した遊
 びばかりをすると云ふ事も出来ぬが、さう云ふや
 うな傾きがあるとすればさう云ふ傾きを以て方針
 を極めてやらねばならぬと思ふ、これは先刻申し
 た通り他學者の集めた種々の遊戯の事でありませ
 すが、今直に此論が適する適せぬと云ふ事は言はれ
 ぬ、大体平常感する事に思ひ當つて居りますから
 他國の實例ではありますすが申上げた次第でありま
 す、
 凡て遊戯をさするに就ては遊戯に就て種々目的が
 ある、例へば泥遊びをさせる、或は人形を飾つて
 遊ばす事にしても之を分析すれば種々ある、譬へ
 て見れば美麗に飾るとか、齊整に飾るとか云ふ事

も其内でさせなければならぬ、或は能く保存をし
 て置く、一遍飾つた以上は後とはドウなつても構
 はぬ、それを能く保存せねばならぬ、同じ泥遊び
 をするに就ても能く作る事ばかりに着目するは大
 變間違と思ふ、能く作つて保存する、貯蓄して置
 く、出来さへすれば後とは毀はしても宜い、恩物
 を子供に與ふることにては子供が家へ持つて來れ
 ば忽ちに忘れて仕舞ふ、保存は出来ぬ、仕舞つて
 置き、或は他の人に見せて快樂を與へると云ふ事
 はドウもないやうに思はるゝ、故に作る一方はか
 りを目的とする譯でもありませんまいけれども作る
 だけならば智力の一方に偏すると思ふ、故に仕舞
 つて置いて蓄へて置き、人が來たならばそれを見
 せる、それを蓄へる考へも起らず、人を愉快にす
 る爲めにもせぬならば効がないと思ふ、唯智力は

かりに片寄るならば毎日々々手数を掛ける事は効能が少ないと思ふ、學校に於ても、時々子供に命じて前に與へたものを持つて來て見せとかそれが能く保存してあつたとか、ドウ云ふ風に人に見せて愉快にさせたとか云ふ事まで考へねば智力一片にのみ偏して恩物を與ふるの旨趣にあらざるべし今日幼稚園を智力的に傾くと云ふ評があるは蓋しさう云ふ所から來たではないかと思ふ、又小學校なぞにて作文を書かせるにしても繪を畫かせるにしても學校の教場に兒童があるときは能く考へても家に歸れば一向其事を考へず、蓄へて置きて人に見せて愉快を與へると云ふものにまでそれが及んで行くと云ふ事が深くない、それから當り前の競争ならば競争をさせること元とより宜ろし然し只自分が面白く遊べば宜いと云ふ方に傾く、唯自

分が唯遊ぶやうな事が上手になれば宜いと云ふやうになつて共同的に斯うすれば人の迷惑になる、斯うすれば人が愉快を感じると云ふ事は無頓着なると云ふ傾きがないとは言はれぬ、同じ遊戯をさせるとも其内を分析して考へて見ればドウ云ふ遊戯でも種々なる要素がある、唯智力ばかりをやつてそれで終つては効力が薄いと思ふ、遊戯にしても種々の事の要素を含んで居るからそれを皆實行するやうにして成るべく分量を少なくして其事を首尾一貫して考へるやうにして行く事が大變必要であらうと考へるです、

それで甚だ不束でありますが遊戯の方針を定むると云ふ事に就て感じた事を申上げた次第であります(完結)